

今週の為替相場見通し(2019年6月3日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.28 ~ 109.92	108.28	107.50 ~ 109.00
ユーロ	(ドル)		1.1116 ~ 1.1215	1.1168	1.1080 ~ 1.1300
(1ユーロ=)	(円)		120.93 ~ 122.80	121.00	118.80 ~ 122.00
英ポンド	(ドル)		1.2560 ~ 1.2754	1.2629	1.2550 ~ 1.2750
(1英ポンド=)	(円)	*	136.64 ~ 139.65	136.79	136.00 ~ 138.50
豪ドル	(ドル)		0.6898 ~ 0.6944	0.6937	0.6800 ~ 0.7050
(1豪ドル=)	(円)	*	75.09 ~ 76.17	75.12	74.00 ~ 76.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1)今週の予想レンジ: 107.50 ~ 109.00 円

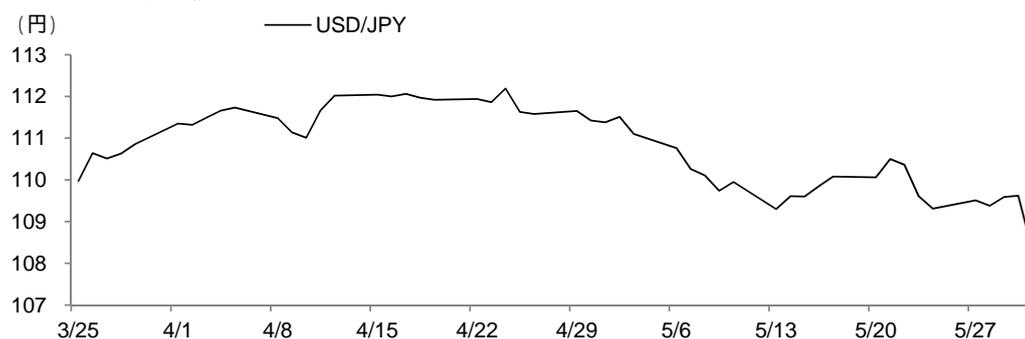
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週末にかけて下落する展開。週初27日に109円台前半でオープンしたドル/円は、ロンドン、ニューヨークが休場となる中、日米首脳会談において為替や自動車輸出規制などの具体的な要求が出なかったことから109円台半ばで底堅く推移した。28日は米5月消費者信頼感指数の良好な結果を好感すると、ドル/円は109円台後半まで上昇したが、その後は米金利低下に伴い109円台前半まで反落した。29日は前日の米株価の下落を受けて日経平均株価も下落する中、ドル/円も109.15円まで連れ安に。その後も米中貿易摩擦の長期化懸念を背景に109円台前半で推移するも、米7年債入札が弱かったことから大幅低下していた米金利が反転上昇する動きに109円台後半まで上昇。30日も米中貿易摩擦への懸念が熾りつつも月末絡みのドル買いフローがドル/円を押し上げ、一時週高値となる109.92円をつけた。だが、その後は米4月中古住宅販売仮契約が予想を下回ったことなどから109円台後半まで反落した。31日はトランプ米大統領がメキシコの全製品に5%の関税をかける発言したことによりリスクオフムード。米金利の低下と共に終日下落し、週安値となる108.28円で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。米中貿易摩擦については中国側がレアアースの対米輸出を制限するとの報道もあり、問題解決どころか両者譲らない姿勢を保っている。閣僚級の貿易協議の予定もない中、問題の長期化が懸念され、円買い要因となるであろう。更に先週金曜日米トランプ大統領が突然メキシコに対し関税をかける発言したことによりリスクオフムードが高まっている。先週末は米金利の低下とともにドル/円も下げ止まらず、今週も下落リスクが警戒されるであろう。今週米国では重要指標の発表やFRB関係者の発言が相次ぐ。米中貿易摩擦の実体経済への影響が確認される場合には一段のリスクオフに注意が必要となる。また先日クラリダFRB副議長はインフレ低迷が長期化するようであれば対応を検討すると述べハト派と受け止められている。今週のクラリダ副議長、パウエルFRB議長の発言がハト派と受け止められる場合には米金利の低下からドル/円が下落する展開もあるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: 安値 108.28 円 高値 109.92 円 終値 108.28 円



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2550 ~ 1.2750 136.00 ~ 138.50 円

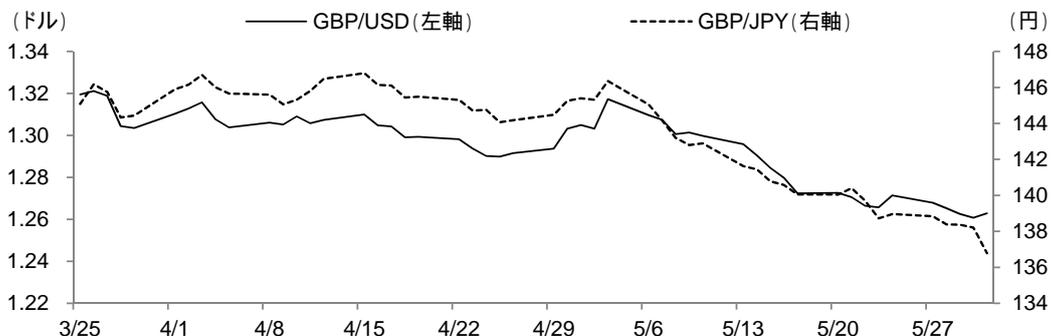
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、全般に小動きながら下落。対ドルではほぼ一貫した軟調推移を続けたが、対円では軟調推移先行から週引けに掛けて急落、対ユーロでは横這い先行から週引けに掛けて一時急落と、主要通貨に対しても、値動きは微妙に分かれた。週明け27日は英米市場休日で、市場参加者に乏しい、動意を欠いた展開が予想された。しかし、発表された欧州議会選挙の結果(英における投票は23日に済んでいた)を受け、小幅ながらポンドは全面安に反応。今年10月末の合意なきEU離脱を標榜する英離脱党の躍進は、事前の世論調査などで予測されていたものの、正式なき投票結果を受け、改めて嫌気されたものと考えられた。翌日以降も、合意なき離脱に対する警戒感がポンドの値動きを重くしたと考えられたが、並行してユーロも軟調推移を続けたことで、ユーロ/ポンドは概ね横這いを続けた。EUの財政規律を破る(財政赤字拡大)可能性を示唆したサルベニ党首率いる同盟(イタリア)が、やはり欧州議会選で大きく勢力を伸ばしたことがユーロの重石となったものと考えられた。週引けに掛けての値動きは、リスク回避の円高と考えられた。トランプ米大統領が、メキシコからの輸入品に(6月10日から)5%の関税を課すと発言。かねてから世界経済の成長阻害要因と警戒されていた米中貿易戦争に、新たな阻害要因が加わったことで、株価全般が統落。ポンド/円の急落がポンド安をけん引し、ポンドは一時、対ドル、対ユーロでも大きく水準を切り下げた。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を中心に予想。仮に値幅が出るとしたら、ポンド反発余地の方が大きいのではないかと。敢えてポンド反発の可能性を高く評価するのは、先週のポンド安をけん引したのがポンド/円の急落(円高)だったから。言い方を変えるなら、「リスク回避の円高」の持続性に疑念を抱くから。円高の引き鉄となったのは、対立が深まる米中貿易戦争にせよ、日欧に対する自動車関税にせよ、今般の対メキシコ関税にせよ、全て米政権の自作自演に等しい。それが株価下落という形で逆噴射している現状は皮肉なことだが、2000年の再選を目指すトランプ大統領にとっては、米株浮揚は最優先課題のはず。だからと言って、振り上げた拳を早々に下ろすわけにもいかない同大統領が、おそらく今後矛先を向けるのはFRBの金融政策ではなかろうか。仮にトランプ大統領が株価下落の責任をFRBに押し付けたとしても、既にここまで低下した米長期金利に更なる低下余地は限られよう。肝腎なことは、仮に米金利がこれ以上低下する可能性が広がったとしても、金利差が縮まっただけでは、資金が投資妙味に乏しい国(例えば日本)に向かわないのも、(足元米長期金利の急落ぶりが物語る通り)容易に米国から流出しないのも、現在までに明らかになったと考えられることではないか。膠着を中心に見るのは、当面、英のEU離脱交渉になんの進展も期待できないから。交渉の手綱はメイ首相から後継首相に渡されることになるが、保守党党首選はメイ首相の辞任(6月7日)を待って10日から始まり、7月下旬まで掛かるものと見込まれている。もちろん、今後観察されるであろう後継首相候補の浮沈と、それに応じた有力候補の交渉方針が材料視される局面は想定できなくもないが、それにしても今週すぐには考え難い。英経済指標にも、今週は目を引くものは予定されない。他に、6日(木)の欧州中銀理事会では、新規の条件付き長期リファイナンスオペ(TLTRO)の実施方式の詳細発表などが期待され、興味深いのが、ポンドに与える影響は限定的と見込む。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.2560 高値 1.2754 終値 1.2629
(対円) 安値 136.64 高値 139.65 終値 136.79



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6800 ~ 0.7050 74.00 ~ 76.00 円

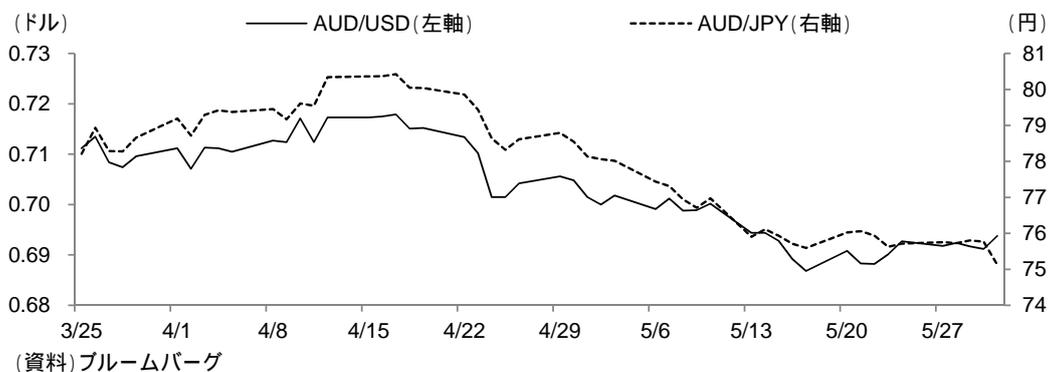
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、方向感に欠ける値動きで0.69前半でもみあう展開となった。27日、NY、ロンドン休場で薄商いの中、目立った材料なく豪ドルは0.69台前半で揉み合い。28日、米5月消費者信頼感指数が予想以上に上昇したことを受けて豪ドルは一時0.6935近辺まで上昇するも、米中貿易摩擦の更なる悪化を懸念し株価が大幅下落すると、0.6920近辺まで売り戻された。29日、中国が米国による関税引き上げに対する報復としてレアアース輸出規制を検討しているとの報道を受けてリスク回避の動きが拡大。株安・債券高の展開となる一方、豪ドルは底堅く推移し、0.6920を挟む狭いレンジで取引された。この日、豪10年国債利回りはRBA政策金利の1.5%を下回るレベルまで低下し、豪3年国債利回りは過去最低を更新した。30日に発表された豪4月住宅建設許可件数及び民間設備投資額はどちらも予想比大幅悪化となったが、豪ドルの反応は限定的で、0.6920台で揉み合い。31日、トランプ米大統領がメキシコからの不法移民に対する報復として輸入品に5%関税を課すとのヘッドラインが伝わると、瞬間的に豪ドルは売りで反応するも直ぐに全値戻し。弱い米5月ミシガン大学消費者信頼感指数を受けて、米金利が低下すると豪ドルは0.6930台まで上昇して引けた。

今週の豪ドル相場は0.69台前半での揉み合いを予想する。先週は米中貿易戦争の長期化懸念、米国景気後退の思惑が浮上する中、世界的に株安・債券高が進む一方、豪ドルは以外に底堅い値動きを見せた。6月豪州準備銀行(RBA)理事会を今週に控え、市場では利下げ観測が高まっている。これまでRBAは利下げ方向に舵を切らず様子見を継続する理由として堅調な労働市場を挙げていたが、5月に発表された豪4月雇用統計の悪化を受けて、市場が盛り込む利下げタイミングが前ずれし、豪キャッシュレート先物金利は次回RBA理事会での利下げを99%織り込んでいる。仮にRBAが6月理事会で利下げを実施した場合でも、市場ではすでに年内2回以上の利下げを織り込んでいることから、豪ドル相場への影響は限定的と予想する。声明文の内容が市場が期待する程ハト派的ではなかった場合は、行き過ぎた利下げ観測からの揺り戻しの可能性もあろうだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.6898 高値 0.6944 終値 0.6937
(対円) 安値 75.09 高値 76.17 終値 75.12



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。